



公益財団法人日本民藝館所蔵建築明器の調査

中国漢代のものとされる建築明器の調査をおこない、東アジアの古代建築における屋根の瓦の葺き方や、用途不明の道具瓦の使用方法を検討するための手がかりを得た。

本文34頁参照（撮影：栗山雅夫）



松江神社建造物調査

松江神社は寛永5年（1628）に松江藩主堀尾忠晴によって松江東照宮として建設された。寛永15年（1638）に、松平直政により権現造の形式に改められ、明治32年（1899）に松江城二之丸地区に松江神社として移築された。地方大名勧請の東照宮のあり方を示す好例である。

本文38頁参照（撮影：杉本和樹）

図版 2

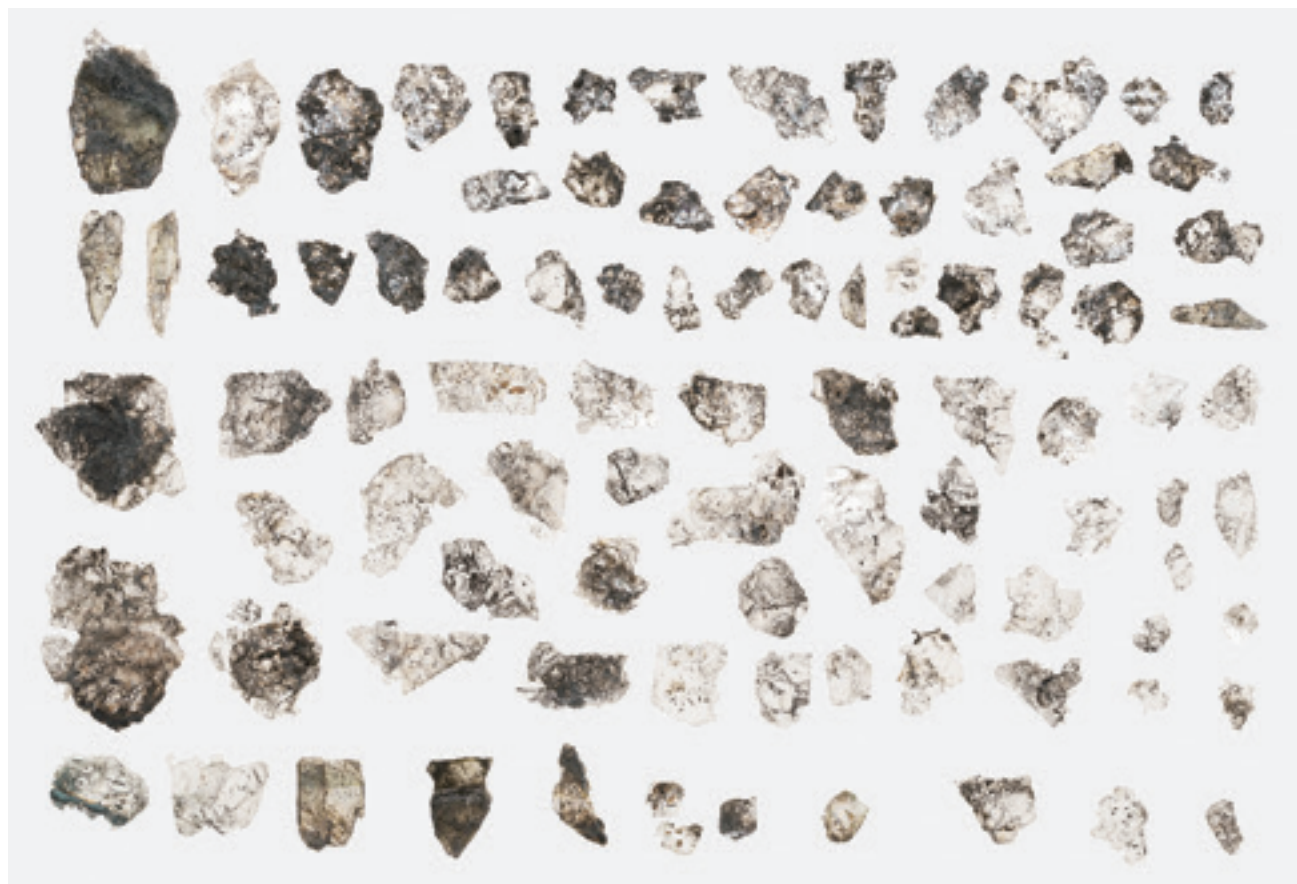


府中市熊野神社古墳から出土したガラス玉

(上・下) 横穴式石室から出土したガラス玉 (左からG001～ G006)。無色に近い色調で、7世紀までの日本列島では類例が認められない。

(右) 周溝表土から出土したガラス玉。部分的に白色風化層に覆われているが、本来の色調は淡青色不透明である。

本文68頁参照 (撮影：大賀克彦)



飛鳥寺塔心礎出土の雲母

飛鳥寺の塔心礎周辺から出土した遺物は、推古天皇元年 (593) の舍利埋納儀礼の実態を知るための重要な資料である。

雲母はすべて細片であるが、今回それを整理し、東アジアにおける雲母埋納の諸例と比較検討した。

遺物番号は左端の雲母片で数えて上2列分が37-8、中央2列と右下3点が7-3、下列の左から2-5C (2点)、22-1B (2点)、15-5E3 (4点)、15-5D3 (1点)。

本文20頁参照 (撮影：栗山雅夫)



藤原宮大極殿院の調査（飛鳥藤原第205次）

調査区全景。奥の森は大極殿で、調査地は大極殿院東北部にあたる。大極殿院東面北回廊をあらたに約30m分検出するとともに、内庭に施された礎敷を確認した。内庭部には建物などの痕跡が存在せず、礎を敷いて整備した空閑地が広がっていた。また、回廊基壇に沿って掘られた造営時の素掘溝や、藤原宮造営前に設けられた条坊道路の側溝なども確認した。北東から。本文80頁参照（撮影：栗山雅夫）

（右）東面北回廊SC9490。棟通りと東側柱通りの礎石据付穴を8基ずつ、計16基確認した。桁行柱間は、大極殿院回廊の基本的な寸法である14尺より狭い間隔で割り付けていることがあきらかとなった。北から。

（下）東面北回廊棟通りの礎石据付穴。今回の調査で検出した礎石据付穴のうち、もっとも残存状態の良いもので、中央に礎石の最下部が東西60cm、南北80cmの範囲で残る。北から。



図版 4



藤原宮大極殿院の調査（飛鳥藤原第205次）

先行四条条間路南側溝SD2075。下層調査区で、東西5.6m分を検出した。溝の南肩は後世の削平で失われているが、幅は2.0mほどと考えられ、深さは0.8mである。北側溝SD2076もほぼ同規模で、両側溝の中心間距離は6.8mである。西から。

本文80頁参照（撮影：栗山雅夫）

東面北回廊下層の杭SX11600検出状況。棟通りの礎石据付穴の断割調査により検出した木杭で、回廊基壇造営前に打ち込み、基壇を造る際には上部を折り取ったと考えられる。同様の杭を約10m南の棟通り上でも確認した。大極殿院回廊の位置を設定する際の基準杭であった可能性がある。北東から。



藤原京左京八条三坊の調査（飛鳥藤原第202次）

調査区全景。調査地は左京八条三坊東南坪にあたる。調査区中央には弥生時代後期から藤原京期にかけての自然流路NR670A・Bが横断するように北西に流れる。ほかにも弥生時代後期の井戸や土坑、古代の柱穴列、中世の掘立柱建物や井戸、溝などを検出し、調査地周辺が弥生時代後期から中世にかけて活発に利用されていたことがあきらかになった。南東から。

本文98頁参照（撮影：栗山雅夫）

藤原京左京三条三坊の調査（飛鳥藤原第204-6次）

（右）調査区全景。調査地は藤原京左京三条三坊東南坪および西南坪に位置する。今回の調査では、東三坊坊間路両側溝をほぼ推定位置で検出した。また、弥生時代後期から古墳時代にかけての土坑や井戸、溝などを検出し、調査区西部では沼状遺構が広がっていることが判明した。西から。本文107頁参照（撮影：飯田ゆりあ）



（下）土坑SP11576。調査区中央南寄りで確認した。直径1.3m、深さ0.7m。現代の土管埋設溝に一部壊されている。柱穴の可能性もあるが、これと組む柱穴は確認できなかった。埋土から古墳時代前期前葉の広口壺が出土した。南から。（撮影：栗山雅夫）



大官大寺南方の調査

（飛鳥藤原第203次）

調査区全景。左奥は雷丘。調査地は大官大寺と山田道にはさまれた藤原京左京十一条四坊にあたる。下層から飛鳥Ⅰの土器を含む東西溝SD4590を検出し、調査地周辺に飛鳥時代の遺構が広がる可能性が高まった。北東から。

本文114頁参照（撮影：栗山雅夫）





平城宮東方官衙地区の調査
(平城第621次)

調査区全景。東方官衙地区のうち、大型基壇建物を検出した平城第615次調査の西隣接地を調査した。区画施設として南北築地塀と東西築地塀を確認するとともに、基幹排水路やこれに注ぐ石組暗渠・木樋暗渠などの排水施設を検出した。南東から。
本文148頁参照 (撮影：飯田ゆりあ)



興福寺境内の調査(鐘楼地区)(平城第625次)

(左) 調査区全景。鐘楼基壇全体を含む調査区を設定し、その規模と構造が判明した。基壇上面に鐘楼袴腰の基礎地覆を据えたとみられる素掘溝がめぐることを確認した。北西から。
本文159頁参照 (撮影：中村一郎)

(下) 石組溝SD10990。鐘楼基壇の北側で検出した。東から。
(撮影：飯田ゆりあ)



鐘楼地区のSfM/MVSによる三次元計測データを標高別段彩表示したもの。室町時代の改修で積み足された基壇土の範囲（茶色部分）がよくわかる。
（計測：金田明大・山口欧志）

鐘楼西面階段SX11381A・B。下層のSX11381Aは基壇裾に厚く堆積する下層炭層SX11412がとぎれる部分から位置を推定。西から。
（撮影：飯田ゆりあ）



興福寺境内の調査（東金堂院地区）（平成第625次）
（右）北区全景。五重塔の正面（西）に開く門の発掘調査をおこなった。礎石据付穴や東側基壇外装の凝灰岩を検出し、門の規模と構造が判明した。北西から。
本文159頁参照（撮影：中村一郎）



（下）南区全景。西面回廊と南面築地塀との取付部に調査区を設定し、回廊の礎石据付穴や築地塀の積土を確認した。また、凝灰岩切石を組んだ東西溝が見つかるなど、取付部の様子がわかった。北から。
（撮影：飯田ゆりあ）





薬師寺東塔の調査（平城第622次）

（左）南調査区全景。南面階段の南端を確認し、階段規模を確定した。階段周囲には犬走りと雨落溝がめぐり、外周部には玉石敷の舗装がほどこされる。左奥は昭和56年に復元された西塔。南東から。

本文152頁参照（撮影：飯田ゆりあ）

（右）北調査区全景。北面階段の北端を確認し、階段規模を確定した。南面と同様に、階段周囲に犬走りと雨落溝を確認。雨落溝底石（写真右手前）が良好に残る。北西から。

（撮影：中村一郎）



法華寺庭園の調査（平城第632次）

Bトレンチ全景。法華寺客殿（写真奥）の前面では、主庭の池護岸が胴木をともなう護岸から擬木列に造り替えられていることがわかった。南から。

本文176頁参照（撮影：飯田ゆりあ）